

中公文庫

叡智の図書館と十の謎

多 崎 礼

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目 次

第一問	7
第二問	43
第三問	79
第四問	116
第五問	152
第六問	188
第七問	224
第八問	260
第九問	297
第十問	333
あとがき	375

叡智の図書館と十の謎

叡智^{えいち}の図書館。それは時間にも空間にも支配されない万智^{ばんち}の殿堂。無限に等しいその書架^{しょか}には、古今東西の知識と思想、ありとあらゆる生命の記憶と歴史、この世に存在する思考のすべてが記録されているという。

叡智の図書館。そこに至りし者は森羅万象^{しんらばんしやう}に通じ、神に等しい力を手に入れる。そんな伝説^{でんせつ}を信じ、多くの者達がその探索に財産と人生を費やした。ある者は「それは陽炎^{かげろう}の彼方、灼熱^{しやくねつ}の砂の海にあり」と、流砂^{りゅうさ}渦巻く大砂漠へ旅立った。またある者は「それは水平線の彼方^{かなた}、大海原の最中にあり」と、荒波が牙を剥く^む大海洋へと出帆^{しゅつぱん}した。が、答えを得て、帰還した者はまだいない。叡智の図書館。それは実在するのか。はたしてどこにあるのか。どうすれば辿^{たど}り着けるのか。答えられる者は誰もいない。

それでも神に至る術^{すべ}を求め、旅に出る者は後をたたない。

第一問

そこに音はなかった。

風もなく、色彩もなかった。

大地は砂に埋もれている。どこまでも続く巨大な砂漠。その砂は白い。乾いた骨のように白い。空は暗く、灰色に淀よどんでいる。太陽も月も見えない。時間も場所も、方角さえもわからない。

そんな死の砂漠を一人の旅人が歩いていく。
擦すり切れた古い長靴、汚し斑みだらけの外がい套とう、目ま深ぶかに被かったフードの下、無ぶ精しょう鬚ひげに覆おわれた顎あごがある。陽に灼やけた肌、突き出した頬ほ骨ぼね、黒い前髪の間隙からは、消けし炭すす色の双そう眸ぼうが覗のぞいている。目尻には細かな皺しわが刻きまれているが、その目は鋭氣に満ちている。

巨大な砂丘に登り切り、そこで男は足を止めた。地平の彼方に目を凝こらす。見渡す限り、白い砂丘が連なっている。まるで押し寄せる波頭、真つ白な砂の海だ。

その中に何かが建っている。天を突くほどの高さは無いが、見逃してしまふほど低くもない。岩石ではない。土塊つちくれでもない。それは無機質な白い塔だった。

旅人は手元に視線を落とした。右手に携えた黒い石板。その表面には金色の文字が浮かんでいる。

『Found』

男は小さく頷いた。砂粒を蹴散らしながら白い砂丘を滑り降りる。疲れを知らぬ足取りで、さらにいくつかの砂丘を越える。

塔は砂漠の直中に建っていた。六つの平面を持つ六角錘、頂点近くには回廊らしき張り出しがあり、六角形の屋根が乗っている。白い胴には幾重にも太い鎖が巻かれている。一つの輪が人の頭ほどもある巨大な鎖だ。窓も装飾もない。出入り口は真つ赤に錆びた鋼鉄の扉だけだった。

扉の前に白い人影があつた。ほっそりとした顎、すらりと通った鼻筋、閉じられた瞼、繊細な睫が白い頬に影を落としている。緩やかな衣に包まれた身体は、抱き寄せればしつとりと柔らかく、息吹や鼓動さえ感じられそうに思える。が、彼女は人ではなかった。それは白磁の肌を持つ乙女の彫像だった。

彫像は銀の槍を抱いていた。刃の根元には宝玉が埋め込まれている。槍の穂先は三日月のように研ぎ澄まされている。この乙女像は守り神、塔の守人であるらしかった。

男は足を止め、眼前の塔を仰ぎ見た。

「どうだ？」

軋んだ声で尋ねる。それに呼応するように、石板の表面に金色の文字が現れる。

『This is it.』

旅人は石板を抱え直した。塔に向かい、用心深く歩き出す。あと数歩の距離まで近づいた時だった。前触れもなく彫像が動いた。滑らかに槍を一閃し、切っ先を旅人に向ける。

「汝に問う」

彫像が言葉を発した。冷たくて抑揚のない声だった。白い臉は閉じられたまま、唇も表情も動かない。

「回答の機会は一度きり。逃亡すれば頭を落とす。答えなければ首を削ぐ。答えを間違えれば心臓を貫く」

「待ってくれ」旅人は両手を挙げた。「武器は持っていない。争うつもりもない。まずは穏便に話をしよう」

彫像は応じなかった。鋭い刃先を彼に突きつけたまま、「逃げるか、死ぬか、答えるか。十秒以内に決定せよ」と宣言し、秒読みを開始する。

「聞く耳持たず、か」

旅人はため息をついた。「どうする？」と黒い石板に問いかける。

『「Try」石板の上に文字が瞬く。』

「だが干渉は掟に反する」

『「This is a game. Not interference」』

「詭弁だな」

議論している時間はない
『No time to argue.』

秒読みは、この時、残り二秒になっていた。

やれやれと呟いて、男は彫像に向かつて両腕を開いた。

「承知した。お前の問いに答えよう」

「汝に問う」間髪を容れず、彫像は言った。「終わりのなき夜に生まれし者。光を知らず、色を知らない。しかしながら世界を見たい、知識を得たいと欲するのは何故か」

検索中……
『Searching..』

石板に金色の文字が明滅する。旅人は無言でそれを見守っている。彫像の乙女は微動だにせず、彼に槍の穂先を向けている。

検索完了再生
『Completed : Play』

石板の表面に、雪を被った険峻な山々が映し出される。裾野に広がる暗い森。剥き出しの岩肌。灰褐色の崖。そこに何かがある。何かが蠢いている——



アハートは《戦士》だ。身体は大きく、力も強い。そんな彼女も、かつては《労働者》だった。保育所を出て最初に就いた仕事は、他の子供達と同じ《穴掘り》だった。

シビル一族が暮らす巣穴は広い。育児部屋も仕事部屋も、倉庫も運動場も充分にある。そ

れでも巢穴を拡張し続けるのは、新たな餌場えさばを探すためだった。

幼い頃からアハートは鼻が利いた。どちらに巢穴を広げれば食料が見つかるのか、鼻で探り当てることが出来た。芋の群生。甘い樹液が出る根。多くの餌場を発見したことで、彼女は他の《労働者》からも一目置かれるようになった。食料の割り当てでも多くなり、アハートはすすくと大きくなった。

次に就いた仕事は《外回り》だった。真夜中に巢穴を出て、木の実や果物を採りに行くのだ。森は危険に満ちている。鋭い牙を持つ狼は群れをなしてシビルを狩る。熊に襲われたら一撃で命を取られる。獐猛どうもうな肉食獣にとつて、シビルは脆弱ぜいじやくな獲物だ。見つければ狩られる。捕まれば喰われる。

だが巢穴の外には狼や熊よりも、もっと恐ろしいものがある。その話をしてくれたのは《教育係》のフォスだった。

「いいかい、アハート。昼の間はね、決して巢穴から出ちゃいけないよ」

フォスは低く不気味な声で言った。

「昼の森には《悪鬼あつき》が出る。奴等は凶暴で、血が大好きで、食べもしない獲物まで殺す。そのくせとても狡賢ずるがしこくて、あたし達の言葉を真似る。温かくて快適な巢穴に入り込むために、仲間のふりをして近づいてくるんだよ」

まだ子供だったアハートは、それを聞いてぶるぶると震えた。

「じゃあ、どうすればいいの？ どうやって仲間と《悪鬼》を区別すればいいの？」

「簡単さ。《悪鬼》の息はとっても臭い。鼻がひん曲がるほど臭いんだ。水浴びしても、花で飾っても、誤魔化し^{ごまか}きれるもんじやない」だからねと言つて、フォスはアハートの鼻をつついた。「怪しい奴がいたら、まず臭い^{にお}を嗅^かいでみるんだ。もし《悪鬼》なら、そいつはピツクリするほど臭いはずだよ」

シビル一族は《悪鬼》を恐れた。そのため巢穴から出るのは夜の間だけと決められていた。森に棲^すむ肉食の獣はそのほとんどが夜行性だ。夜の森で食料を探すのは、まさに命懸けの仕事だった。

初めて巢穴から出た時、アハートは震えが止まらなかった。肉食獣や《悪鬼》に出くわすことを想像するだけで、恐ろしくて吐き気がした。けれど、ここでも彼女の鼻が役に立った。アハートは危険な臭いを嗅ぎ分けた。彼女は肉食獣の接近をいち早く察し、素早く巢穴の中へ逃げ込むことが出来た。

心に余裕が出来てくると、少しずつ外に出ることが楽しくなってきた。森は刺激と魅力に満ちていた。新鮮な草の匂い、芳^{かぐわ}しい花の香り、木の幹に滲^{にじ}む甘い汁、しりしりと青葉を嚙^{かじ}る芋虫^{いもむし}、野鼠^{のわすみ}達が鳴き交わすキチキチという警戒の声、がさがさと茂みを揺らしながら走り去る兎。

雨の夜は特に素晴らしかった。雨粒が木の葉を打つ音、水滴が水溜まりに落ちる音、それらに耳を傾けながら雨の中に佇^{たたず}んでいると、自分がどこにいるのかわからなくなってくる。身体がどんどん希薄になって、空気に溶けていくような気がする。そんな不思議な感覚が、

アハートは大好きだった。

楽しいことは他にもあった。アハートは食べ物の匂いを嗅ぎつけるのが得意だった。食料を求め、他の《外回り》が地面を這い回っている間に、彼女はいつも容易くそれらを見つけて出すことが出来た。甘酸っぱいツブモモの実、芳ばしいカワグリの実、埃臭いホホキノコ、黴臭いマルキノコ、アハートの籠はすぐにいっぱいになった。採り切れない分は彼女の胃袋に収まった。巣穴を出るたび、アハートは果物や木の実を腹一杯に食べることが出来た。彼女が他の《労働者》より大きく育ったのは、このつまみ食いのせいかもしれない。

やがてアハートは《労働者》から《戦士》へ格上げされることになった。女王様から《戦士》の証である骨の剣を与えられ、仲間達からも手厚い祝福を受けた。嬉しくて、誇らしくて、彼女は胸がいっぱいになった。

けれど、もう巣穴の外に行くことは出来なくなるのだと思うと、さみしくもあった。《戦士》の仕事は巣穴を守ることだ。交代で巣穴の出入り口近くに立ち、昼も夜も見張りを続けなければならない。

巣穴には出入り口が三つある。一つめは水の口。その名の通り、水を汲むための出入り口で、滝の裏側に向かって開かれている。二つめは西の口。これは畑のすぐ傍にある。口の近くには貯蔵庫があるため、鼠や兎、時には蛇や狐も入ってくる。これらを捕らえ、《調理係》に渡すのも《戦士》の仕事の一つだ。三つめの東の口は、森に向かって開いている。《外回り》が外に出るために使うのもこの口だ。東の口は大きく、道幅も広い。そのため、鳶を編

んだ《蓋》^{ふた}を閉じていても、危険な肉食獣達の侵入を完全に防ぐことは出来なかった。

「獣が巣穴に侵入してきたら、《戦士》は力を合わせてこれと戦う」

先輩《戦士》のネイトは言った。

「相手が野犬や狐ならば退治することも可能だ。狼や猪の場合は盾で道を塞ぎ、声と剣で脅して追い払う。最悪なのは腹を空かせた熊だ。退治出来るような相手ではないし、盾で道を塞いでも突き破られる」

ネイトの声は洪く、その髪からは乾いた血の臭いがした。それは《戦士》の臭いだった。アハートは剣の柄を握り締め、おずおずと問いかけた。

「では、どうするのです？」

「命懸けで戦うのだ。傷つき倒れ、真っ先に喰われることで、仲間達が巣穴の奥に逃げ込むための時間を稼ぐのだ」

それが《戦士》の心得だとネイトは言った。それを聞いてアハートも覚悟を決めた。たとえ自分が死んでも、女王様や王様や一族の仲間達が助かるのならそれでいい。死ぬのは怖いけれど《労働者》として穴を掘ったり、芋や茸を育てたり、子供の世話をして生きるより、《戦士》として仲間を守って死ぬ方が、自分の性には合っている。

アハートは《戦士》として勇敢に戦った。野犬と渡り合い、狼の群れを撃退し、いくつもの傷を負った。傷口が腫れて熱を出し、生死の境を彷徨ったこともある。《戦士》達は次々と死んでいった。彼女に《戦士》の心得を説いたネイトも死んだ。それでもアハートは臆す

ることなく戦い、そして生き延びた。そんな彼女のことを、仲間達は《誰よりも強くて勇敢な戦士》と呼ぶようになっていた。

そんなある日。アハートはいつものように東の口で見張り番をしていた。《蓋》の向こう側から雨の匂いが漂ってくる。まだ雨音は聞こえないが、そのうち降ってくるだろう。

アハートは密かにため息をついた。雨の降る夜は森に出たくてたまらなくなる。しかし持ち場を離れるわけにはいかない。責任ある《戦士》が自由気ままに森に遊びに出ることなど許されない。

やがて夜は更け、交代の見張り番がやってきた。アハートは自分の^{ねぐら}厩に戻りかけ、途中で気が変わった。彼女は西の口へと向かった。その近くには使われなくなった倉庫があった。倉庫の天井には小さな通気口があり、そこから雨が吹き込んでいた。

アハートは通気口の下に立った。顔を上げると頬に水滴が当たった。したしたしたと雨音が響く。湿った土と濡れた草の匂いがある。久しぶりに味わう雨の気配。冷たい夜の空気を胸一杯に吸い込むと、怒りにも似た感情が湧き上がってきた。外に出たい。大声で叫びたい。雨の中を走りたい。そんな衝動が込み上げてくる。

「これはいったい何だ？」

アハートは戸惑い、自分の胸を押さえた。

「私はどうしてしまったんだ？」

その時、遠くから足音が聞こえてきた。誰かが廊下を歩いてくる。見回りの《戦士》にしては軽すぎる。それにこの香り。花蜜はなみつのような芳しさ。これは女王様の匂いだ。けれどこの時間、女王様は寝室でお休みになっているはずだ。いったい誰だろうとアハートは耳をすませた。謎の足音は近づいてきて、倉庫の前で止まった。

「久しぶりですね、アハート」

名を呼ばれ、アハートは驚いた。聞いたことのない声だった。女王様ではない。若い男の声だった。

「お前は誰だ？」

「わかりませんか？ まさか僕のこと、忘れてしまったんですか？」

「すまない。忘れた」

アハートが素直に謝ると、若い男はくすりと笑った。

「僕はロウ。貴方あなたに助けて貰もらった《森の子供》です」

「ああ！」小さく叫んで、アハートは手を打った。「私が拾った森の子か！」

まだアハートが《外回り》だった頃。巣穴から離れた森の中で、泣いている子供を見つけた。その子は寒さに凍え、ひどく腹を空かせていた。迷った挙げ句、アハートは彼を巣穴に連れ帰った。自分の食事を分け与え、自分の寢床で休ませた。そうして彼の体力が回復するのを待ってから、《穴掘り》のところに連れて行った。

その子供がロウだった。最初は彼の様子が気になって、暇さえあれば会いに行った。けれ

ど《戦士》になつてからは足が遠のいて、会う機会もなくなつていた。

「そうか。声変わりしたんだな」

アハートはロウの肩口に顔を寄せ、首筋の匂いを嗅いだ。

「匂いまで変わつてゐる。まるで女王様みたいな匂いがする」

「毎晩女王と同衾どうきんしてゐますからね。匂いが移つたのでしょうか」

「ということは、まさかお前——」

「そうです。僕、王に選ばれたんです」

驚きのあまり、アハートはひっくり返りそうになつた。王様は女王様の次に特別な存在だ。その役目は女王と子をな生ずること。それに尽きる。王は働く必要も戦う必要もないが、女王の寝室から出ることは許されない。ましてや危険な出入り口に近づくなど、あつてはならないことだつた。

「何をしに來た？ とつとと寝室に戻れ——じゃなかつた。陛下、早くお部屋にお戻り下さいませ」

「見逃して下さい」ロウは深いため息をついた。「寝室は空気が悪くつて、息が詰まるんです」

その気持ちはアハートにもよくわかつた。こんな雨の降る夜に巢穴の奥に閉じ籠こもつてゐるなんて、考えただけでも気が滅入る。

「では少しだけですや？」

「その口調、やめてくれませんか？ 貴方に畏かしこまられると背中がむず痒がゆくて仕方がない」
そう言つて、ロウはクスクスと笑つた。

「貴方は僕の救い主です。今まで通り、偉そうにしていして下さい」

「私は偉そうになどしていいぞ」

「そうそう、アハートはそうでなきゃ」

ロウは倉庫に入り、通気口の下に立つた。アハートは彼の隣に立ち、雨の音に耳をすませた。吹き込んでくる雨が二人の髪を濡らしていく。彼等は黙つて立つていた。長い間、黙つて雨音を聞いていた。

「気持ちのいい夜だ」とアハートは呟いた。

「そうですね」とロウが応じた。「こんな夜は、昔のことを思い出します」

「昔のこと？」

「この森に捨てられる前、僕はカリッサで暮らしていたんです」

「カリッサ？ 別の巢穴か？」

「カリッサは森の外にある街の名前です」

「なんだつて!!」

素すつ頓とん狂きやうな声でアハートは叫んだ。

「森の外には《悪鬼》がいるんだぞ。お前、《悪鬼》と一緒に暮らしていたのか？」

「違います。森の外にいるのは《悪鬼》ではありません。彼等は——」

そこでロウは言葉を切った。小さく咳をしてから、改めて切り出した。

「実は僕、ずっと前から、貴方に訊きたいと思っていたことがあるんです」

「何だ？」

「貴方はどうして僕を助けてくれたんですか？」

「いい匂いがしたからだ」その時のことを思い出し、アハートは微笑^{ほほえ}んだ。「最初は《悪鬼》が子供に化けているのかと思った。だが、お前からはいい匂いがした。懐かしいような、胸が苦しくなるような、腹の底がむずむずするような匂いがした。臭くないなら《悪鬼》じゃない。《悪鬼》じゃないなら捨て置けない。だからお前を連れ帰った」

「それだけですか？」

「それだけだ」自信たつぷりにアハートは答えた。「私は叱られず、お前も追い出されなかった。つまり私の判断は正しかったということだ」

「相変わらず大雑把^{おおざっぱ}ですね」

^{あき}呆れたような声で言い、ロウは笑った。

通気口から外気が吹き込んでくる。雨は冷たく、風は湿っている。下草をかき分けて鼠が走り回る音がする。梟^{ふくろう}が空を横切つて飛ぶ音がする。

「そろそろ部屋に戻ります」

寂しそうなロウの声。それにアハートが応じかけた時、彼は思い切ったように続けた。

「また貴方に会いに来てもいいですか？」

「いいわけないだろう」

険しい声でアハートは言った。王様は女王様のものだ。アハートのような雌の《戦士》が気易く会っていい相手ではない。

けれど、ロウは引き下がらなかった。

「僕、待ってますから。明日の夜も、同じ時刻にここに来ますから」
そう言うと、答えも待たず、彼は倉庫を出て行った。

翌日。見張り番を交代すると、アハートは自分の時に戻った。あの倉庫には行かなかった。ロウに会いたくなかったからではない。掟を破りたくなかったからだ。もしロウと会ったことが女王様に知れたら、アハートは巢穴から追い出されてしまう。ロウのことは嫌いではない。けれど優先すべきは彼ではなく、女王様への忠誠であるべきだ。

数日は何事もなく経過した。ロウと再会したことも、約束をすっぱかしたことも記憶から薄れ始めた頃。アハートはあの匂いを嗅いだ。間違えようなない独特な薫^{かお}り。それはロウの匂いだった。

「おはよう、アハート」

爽やかに挨拶するロウに向かい、アハートは牙を剥いた。

「何をしに来た！」

場所は東の口のほど近く、しかも夜明けが間近に迫っている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。